# 江戸文学の詩と真実

野口武彦著

中央公論社

江戸文学の詩と真実　©1971　定価 580円
昭和46年5月20日印刷　昭和46年5月30日発行　検印廃止
著者　野口武彦　発行者　山越　豊　印刷所　三陽社
発行所　中央公論社　東京都中央区京橋2丁目1番地　振替東京34番

# 江戸文学の詩と真実

野口武彦著

中央公論社

目次

祇園南海論　9
銅脈先生伝　71
大田南畝の「転向」　133
太宰春台の孤独　173
*
江戸文学の「詩」と「真実」　209

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

# 江戸文学の詩と真実

# 祇園南海論

# 一

祇園南海、名は瑜、字は伯玉、南海はその号で他に蓬萊、鉄冠道人、湘雲居などの別号がある。南紀和歌山の人、紀州徳川家に仕えた藩儒であるが、むしろ詩名をもって聞こえ、江村北海の『日本詩史』以来、新井白石、梁田蛻巌、服部南郭とならんで江戸有数の大家として知られる。また、池大雅に画法を伝えた南画の創始者のひとりとしても有名である。

わたしは漢詩の専門家ではなく、日本漢文学の研究者でもなく、また美術の分野にいたってはまったくの門外漢という他はない。その不識をもかえりみず、わたしがあえて祇園南海を論じてみようと思い立ったのは、このひとりの文人儒者の生涯と作品とを通じて日本の近世社会における文学者の存在の意味を考えてみようという念願に発している。わたしはこの人物の探求をとおして江戸時代にあっては文学とは何であったかの問題について考え、あわよくばそれを介して文学とは何かというわれわれにとって永遠に新しい問題に接近してゆく上での一つの視点を構築してみたいと思うのである。



试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c

祇園南海がそのひとりであるところの文人儒者と呼ばれる江戸の知識人グループは、わたしのそんな問題意識にとって恰好の対象であるかのように見える。儒者とは、もともとはたんに孔子の学を奉ずるものの謂ではなく、「通二天地人一曰レ儒」というように広く学者の総称であったといわれる。元禄期の京都の儒者、伊藤仁斎は「凡ソ天地ノ間ノ事、儒者ノ事ニ非ザルコト無シ」[1]といった。このように江戸人の意識にあって儒者たることとは、いわば世界と人倫の総体について包括的に思考しうる能力を持った思想家、あるいは少くとも知識人であることを意味していた。それはいいかえれば儒学、なかんずく朱子学という思想の枠のなかで世界と人倫とのすべてが一定のかたちにしかるべく原理づけられることに他ならない。こと文学に関しても、近世の儒者たちは文学という人間精神の一つの営みをもその包括的な思想の体系のしかるべき位置で把握していた。世に文人儒者といわれるのは、十八世紀の中葉近く、享保・元文あたりから目立ちはじめ、宝暦以降には荻生徂徠門下のいわゆる護園末流の進出にともなって一世を風靡するにいたる、もと儒学的教養に出でながらむしろ詩文に遊び文事をこととする一群の人士をさす。しかし、かれらは江戸時代の他の文学創作者たちとはやや異なり、まさに文人儒者として、ただ詩文の制作にたずさわるだけでなく、同時にまたそのことの原理的意味をつねに問題にする思考習慣を持っていたはずである。だから、文人儒者と呼ばれる人々は、江戸時代を通じて自覚的なかたちではほとんど唯一に、文学とは何であるかを念頭におきながら文学の仕事に従事していたということもできるだろう。

ここでわれわれがあらかじめ知っておかなければならないのは、江戸人の用語法でいう「文学」と

われわれのいう「文学」との意味内容のちがいである。このことのこまかな検討は別稿にゆずるとして、端的にいってしまえば、江戸人の、少くとも儒学者の意識にある「文学」とはほとんど排他的に漢詩文を指しており、われわれがいま漠然と近世文学と呼称しているものはその時代にあっては「文学」とは意識されなかった。すなわち、江戸の「文学」はわれわれの文学ではなく、われわれの「文学」は江戸の文学ではなかったのである。しかし、広く江戸時代の文学論あるいは文学意識の推移を眺めわたしてみると、そこには江戸人のいう「文学」から今日的な意味での「文学」へという一つの水路が浮かび出ているように思われてくる。いまそれをきわめて巨視的にとらえておけば、儒学、それも朱子学という強固な世界観的構造を持った思想[2]からの文学の自立の過程であるといえようし、また経学としての儒学から文学が析出されてくる過程ともいえよう。やがて明らかになるように、祇園南海はその過程を身をもって生き、いわば典型的に、というよりもむしろ劇的にそれを体現した人物であった。以下の叙述は、祇園南海という文人儒者、おそらくは一箇の詩魔を身内に棲まわせていてそれが通常の儒者としての生涯から大きく逸脱させ、その多事な生涯を通じて文学思想上はるか遠くの地点まで連れ出されてしまった天成の詩人の興味つきせぬ内面の劇をわたしなりにたどりかえそうとする試みである。

祇園南海、初め名を与一は延宝五年（一六七七）紀伊藩の藩医祇園順庵の子として生まれた。以下、『南紀徳川史』所収の『祇園系譜』その他によって略述すれば、貞享二年（一六八五）、九歳の時、父

に従って江戸に上り、十四歳の時、当時五代将軍綱吉に招かれて江戸で帷を下していた木下順庵の門に入った。南海が後に「元禄己巳（二年）八月廿二日、瑜年十四、初メテ公ニ謁ス。公諭スルニ学ハ精勤ニ在ルヲ以テス」[3]と記すとおりである。それ以後、元禄十年（一六九七）に父の死に遇って二十一歳で家督をつぎ、二百石を給されて紀伊藩の儒官となるまでのおよそ七年前後の歳月を江戸で過すことになる。この七年間の江戸遊学、それも木門に学んだという事情は、南海の生涯に決定的な影響をあたえたもののように思われる。

近世儒学のなかで主流をなした朱子学派の動向を考える場合、木下順庵という儒者はどうしても無視することのできない存在である。藤原惺窩の門人、松永尺五門下の俊秀として朱子学・京都学派の学統を伝え、加賀前田侯の儒官からさらには将軍綱吉の侍講に抜擢されたという個人的な名声もさることながら、特筆すべきはその門下に「桃李門ニ満ツ」と評された成徳達材の士が輩出していることである。寛政期の儒者、柴野栗山の言によれば「盛ンナル哉、錦里先生（順庵をさす）ノ門ノ人ヲ得タルヤ、大政ニ参謀セルハ則チ源君美在中（白石）、室直清師礼（鳩巣）、外国ニ応待セルハ則チ雨森東伯陽（芳洲）、松浦儀禎卿（霞沼）、文章ハ則チ祇園瑜伯玉（南海）、西山順泰健甫（西山）、南部景衡思聡（南山）、博該ハ則チ榊原玄輔希翊（篁洲）皆瑰奇絶林ノ材ナリ」（『錦里文集序』）と感嘆されるほどの多士済々ぶりであった。ここに列挙された人名からも知られるように、木門からは正徳・享保から十八世紀前半いっぱいにかけて、中央政治、外交、詩文とその分野こそちがえ当代一流の人士が踵を接して現われているのである。これをもっても順庵の名教育家であったことがうかがわれよう。しかし、

木下順庵自身は、後に『錦里文集』に収められる厖大な詩作と、他に詩文集若干を残しているのみで、ほとんどまとまった思想的著作は伝えられていない。[4] その点が順庵の思想的位置を研究することをはなはだ困難にしているのであるが、その周辺の断片的な資料から推察してみると、その学風は、朱子学とはいい条、かなりリベラルな雰囲気を持つものであったようである。

順庵の子、木下寅克が『錦里文集』のために撰した序文には、その学問を評して「道徳性命ノ学ヲ以テ根本ト為シ、博聞多識ヲ以テ枝葉ト為ス。其ノ詩賦文章ノ如キハ残膏剩馥ノミ。是ヲ以テ上ハ洙泗ノ淵源ニ遡リ、下ハ濂洛ノ波瀾ヲ挹ミ、傍ラ天経地志釈老稗鈐稗官小説ノ類ニ至ルマデ読マザル無シ」といわれている。荻生徂徠は『学寮了簡書』で「木下順庵なども博学を第一に仕り。材木蔵と異名を付られ候ものにて。講釈は下手にて候」などと書いているし、『先哲叢談』の伝えるところでは「博雑ニ溺ルルヲ悔イ、終ニ蒼黄ニ失ス」と順庵自身もいっている。ここにはおのずから順庵の闊達な学風が浮かび上って来るように思われる。その門下から榊原篁洲のような折衷学とも目される人物が出たことからも知られるように、木門における朱子学はいささか朱子学ばなれのした、といって言い過ぎなら、その時代までの正統の朱子学とはまったく色合いを異にした学風のものだったらしい。少くとも、それがおよそ十年ほど前の延宝初年まで京都に講筵を張っていた山崎闇斎――日本でもっとも朱子学的な朱子学者といわれる――が、『四書集註』・『近思録』というわずか数種類の経書しか弟子に読むことを禁じたようなリゴリスティックな学風とまったく対蹠的なものだったことはたしかであろう。「道徳性命ノ学」を中心にすえながらも、博学を尊んで広く読書を閲覧し、小事にこだわ

らず自由に門下の才能を伸ばすといったこのリベラルな学風のなかから新井白石はじめ多くの俊秀が巣立ったのである。祇園南海もまたそのひとりであった。おそらく順庵によって日本の朱子学はかなりその性格を変えた。日本の朱子学といっても、それは闇斎学にその端的な例を見るように、より多く朱子学主義とでも呼ぶべきものであり、いちじるしい求道的性格を持っていた。しかし順庵あたりを分水嶺としてそれはしだいに現実社会に対する関心を深めてゆくように思われる。新井白石が「有用之学」をめざしたといわれる（『文会雑記』巻之一上）のも決して偶然ではなかったのである。

このような典雅な学風のなかで当時十代であり天賦の詩才にめぐまれた多感な少年だった祇園与一は、ゆたかにその資質をはぐくまれていったと想像される。晩年になってからの筆記である『湘雲瓚語』のなかで南海はその江戸遊学の時代をじつになつかしげに回想している。

予年十六七ニシテ木先生ノ門ニ游学ス。時ニ諸彦済々タリ。石梁越仲通名ハ達、戯レニ月旦ニ倣テ云フ。木門ノ諸子堂ニ登リ、室ニ入ル。藹然トシテ観ルベシ。詩ハ白石、文ハ芳州、瑜ノ能書、佐ノ劇談、篁州戯謔ヲ善クシテ虐ヲ為サズ。南山飲酒ヲ好ミテ醉ニ至ラズ。森子ハ戸ヲ閉ヂテ常ニ昼寝ス。石子楼ニ登リテ動バ（ヤヤモスレ）参禅。達ヤ衣ノ敝ヲ患ヘズ徳ノ敝ヲ患フルノミ。又、他日燕会各〻燭ヲ刻ンデ詩ヲ賦ス。筆墨淋漓、錦繡座ヲ照ス。南山唱シテ曰ク、白石題詩白雪霏。白石即チ和シテ曰ク、南山奏曲南風競。当時ノ風流雅趣藹然トシテ掬スベシ。

当代一派の秀才たちが会しておのがじし学才文才を競う和気藹々たる雰囲気に包まれて、若き日の南海がいかに自己の天分を伸ばしていったかは想像に難くない。右の文中にも見えるように木門はこと

に文事を重んじ、南海の回想にはしばしば師順庵を中心にして催された詩会が現われる。詩作の奨励はまた従来の朱子学にはなかった、少くとも表立っては見られなかったことである。また闇斎を引き合いに出せば「詩賦ノ類ハ一向之ヲ作ル事ヲ禁ズ」（那波魯堂『学問源流』）といったありさまであり、そもそも朱子の「詩ハ必ズシモ作ラザレ」（『語類』巻百四十）というのが朱子学派の基本的態度であったといってよい。だからみずからも詩を多作し、門弟にも奨励した順庵は、朱子学に新風を吹き込み、また後の徂徠学派の文学主義を先取りしたともいえるのである。徂徠は「錦里先生トイフ者出デテ博桑ノ詩皆唐」（『叙江若水詩』）とその詩業の先駆的な役割を称讃しているし、服部南郭にも「スベテ錦里先生ハ詩文ハ拙ケレドモ、学識ハ文運ヲ開クカブラ箭ナリ。唐詩ヲトナヘ出セルハ錦里先生ナリ」（『文会雑記』巻之一下）という評がある。南郭の言はかなり党派的であるが、同じ朱子学の西島蘭渓の『秋堂閑語』になると、順庵の詩の白石への影響に言い及んで、「サスガノ白石モ、木恭靖（順庵をさす）ニ得ル所多シト思ハルルナリ」といっている。もってその盛名が知られよう。

このような詩文愛好の空気が南海の早熟な詩才を伸ばすための絶好の温床であったろうことは言をまたない。果然、まだ十四歳の与一少年が、およそ二十歳年長の新井白石や室鳩巣、約十歳年長の雨森芳洲などの俊才に伍して頭角を現わしはじめるのはその詩作の夙慧をもってである。その年少の日からの詩歴はいくつかの華麗なエピソードを生んでいる。いまわれわれが知るかぎりでの南海の処女作は、元禄三年（一六九〇）、十四歳のとき雨森芳洲の寓居で賦されたという七言律詩『辺馬有帰思』である。



试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.c